

椋山女学園大学大学院教育学研究科 修士(教育学) 学位論文要旨  
*Summary of Master's Thesis: The Degree of Master of Education, Graduate School of Education,  
Sugiyama Jogakuen University*

## その子らしい表現を生み出す要素

——造形表現のプロセスとそれを支える保育——

森 文乃 (教修第002号, 学籍番号 C14DA002)

### はじめに

保育・教育において表現とは、素晴らしい作品をつくることではなく、活動を通して自分なりに思いを持ち、表現したいことをどのように表せばよいのか考え工夫することが重要であろう。ところが実際の保育現場では、子ども独自の表現を考慮せず、見栄えの良いものを作る活動になってしまっていることも少なくない。子どものその子らしい表現を大切に、それを伸ばしていくためには、どのような保育の援助が必要なのだろうか。本論では、その子らしい造形表現が生み出される過程、造形表現の始まるきっかけ、造形表現活動での保育者の援助から、子どもの造形表現活動の在り方を検討する。

### 方 法

第I章と第II章では、レッジョ・エミリア・アプローチを参考にした独自のプロジェクト型保育を実践している保育所・幼稚園に着目して事例を扱う。この保育に着目する理由として、子どもを活動の主体とし、その子の興味・関心から、表現活動を中核として保育が展開されるという特徴がある。このような実践において、よりその子らしい造形表現がうまれると考えた。

第I章では、幼児はどのような過程を経て自分らしい表現を生み出すのかという点に注目する。プロジェクト型保育を実践しているA保育園の作品事例から、幼児の作品制作のプロセスのパターンを分類し、事例から分析する。

第II章では、日常生活と造形表現活動の連続性を大切にするために、その子らしい造形表現活動が始まるにはどんなきっかけがあるのか考察する。プロジェクト型保育を実践しているA保育園とG幼稚園で得られたエピソードから分析する。

第III章では、造形表現活動時における保育者の援助と環境について検討する。ここではプロジェクト型保育を実践する園に限らず、子どもが表したいものを表すために有効である援助がされた事例と環境から分析する。援助に関しては、上記のA保育園と、さらにH幼稚園、S幼稚園から、環境に関しては、A保育園、K保育園から資料の収集をおこなった。

## 結果と考察

### 1. その子らしい表現が生まれるプロセス

8つのプロセスのパターンから、その子らしい表現に必要な要素として、「生活の経験」「環境」「材料」が考えられる。その背景にある心が動かされる豊かな「生活の経験」を持っていることで、子どもは制作時に印象の強い場面や、その時の気持ちを思い出すことができる。そして制作時における「環境」には人的環境（保育者と友達）と物的環境（材料など保育環境にあるすべての物）があり、環境と関わることでイメージが湧いたり、最初のイメージが変容し新たな形となって表れたりすることがある。特に物的環境に含まれる「材料」は、それ自体を造形に使うことができ、子どもが材料と関わることで行為が生まれ、造形表現へとつながる思いやイメージをうみだす。これら要因が関わり合うことで、その子だけのイメージをうみだし、独自の色や形で表される。

### 2. 造形表現が始まるきっかけ

造形表現のきっかけは、「制作経験との関わり」「環境」「新たなできごと」の3つに大きく分けられる。「制作経験との関わり」は、過去に経験した制作の継続や発展だけでなく、逆につくったことのないものだからこそつくってみたいという思いから制作が始まることもある。「環境」の中には人的環境と物的環境が含まれており、人的環境は周りにいる子どもや大人との関わり、物的環境は素材や身の回りにあるすべての物を示す。物的環境の「メディア」には音、文章、映像など多様な情報が含まれており、子どもの造形表現への意欲をかきたてる刺激になりやすいと考えられる。また「新たなできごと」は、子どもがそれまで経験してこなかったような衝撃的・感動的な体験であり、子どもが「表現したい」と強く感じるものと考えられる。

### 3. 制作プロセスにおける保育者の援助

#### ○イメージのひきだし、具体化

イメージを持っていてもそれをうまく色や形として表現できない場合に、保育者が対話や助言によって援助する。

#### ○イメージの広がりや変容を促す言葉や対話

子どもは制作を始める時からしっかりとしたイメージを持たない場合がある。また、子どもは今まで持っていたイメージを様々な要因によって変容させることで、その子の中で新たな意味を構築し、よりその子らしい表現をうみだしていくことがある。そのため、保育者の言葉や保育者との対話によりイメージを広げたり変容させたりしていくことは、その子らしい表現が生まれる過程で大切である。

#### ○素材、道具、技術の提案と提供

子どもが自分の表現したいことを表現するためには、そのための技術の知識や道具、材料が必要であり、それがあっていくことによって、より表現がその子らしくなっていくと言えるだろう。子どもが造形表現をしたいと思った時に、表現したいと思ったことが表現できるような材料、道具や技術を提案、提供することは、保育者の重要な援

助といえる。

○本や映像など、表現するうえで子どもが必要とする情報の提供

本や映像は、「～を描くために、よく観察したい」など、子どもが必要とする場合もあれば、「～をつくるのであれば、図鑑を見ることが有効だろう」と保育者が考える場合もある。イメージを広げたり、具体化させたりするうえで、視覚的な情報が必要とされることがある。

以上4点の援助をする際の前提として、「見守る」援助が必要となる。見守る援助は、その子らしさを引き出す保育者の援助項目の1つとして独立するものではなく、4点の援助をするための基盤であり、見守りなくして適切な援助を提供することは難しい。そして見守ることは放任することではない。子どもの思いや表現を受け止め、子どもに任せてみて、援助が必要になったと思われる時にはいつでも援助できるように見守ることが必要となる。

### おわりに

その子らしい造形表現が生み出されるプロセス、造形表現の始まるきっかけ、造形表現活動での保育者の援助の中の細かい要素は、主に筆者が収集した事例から考えたため、すべての要素を出せていない可能性がある。また、事例の多くが担任の保育者のポートフォリオによるものであり、子どもと保育者の細かい言動を取ることに十分であるとは言えない。そのため、今後は子どもの姿を追い、時間ごとの言動を記録し、さらに多くの事例から、よりの確な要素を検討してみたい。また子ども相互の関わりは子どもの造形表現活動において大きな影響を与えるものである。そこで、子どもの共同性を支えるためにはどのような保育者の配慮や援助が必要なのかについてさらに研究していきたい。

指導教員：磯部錦司 教授

主査：早川 操 教授

副査：磯部錦司 教授

副査：佐藤厚子 教授